

別紙（みどりの食料システム実現に資する農業生産方式）

1 作物ごとの導入すべき農業生産方式（表1）

表1 作物ごとの導入すべき農業生産方式一覧

作物名		区分 農業生産 方式の 内容	堆肥等 施用技術		化学肥料 低減技術			化学合成農薬低減技術											
			堆肥等 有機質資材 施用技術	緑肥 作物施用 技術	局所 施肥技術	肥効 調節型 肥料施用 技術	有機質 肥料施用 技術	温湯 種子消 毒技術	機械 除草技 術	除草 用動物 利用技 術	生物 農薬利 用技術	対抗 植物利 用技術	抵抗 性品種 栽培・ 台木利 用技術	熱利 用土壌 消毒技 術	光利 用技術	被覆 栽培技 術	フェ ロモン 剤利用 技術	マル チ栽培 技術	
稲	水稲	○		○	○	○	○	○	○	○								○	
麦	小麦	○	○	○		○	○	○											
	大麦	○	○	○		○	○	○											
豆	大豆	○	○	○		○		○											
いも類	ばれいしょ	○	○			○		○						○				○	
	ながいも	○	○			○		○										○	
	さといも	○	○			○		○										○	
	かんしょ	○	○			○		○										○	
雑穀類等	雑穀類	○	○	○		○		○		○								○	
	スイートコーン	○	○			○		○		○								○	
野菜	果菜類	きゅうり	○	○	○	○	○			○			○		○	○		○	
		トマト	○	○	○	○	○			○			○		○	○		○	
		なす	○	○	○	○	○			○			○		○	○		○	
		ピーマン	○	○	○	○	○			○			○		○	○		○	
		いちご	○	○			○		○					○	○	○		○	
		さやえんどう	○	○			○		○					○				○	
	葉菜類	えだまめ	○	○			○		○					○				○	
		はくさい	○	○			○		○		○	○						○	
		キャベツ	○	○	○		○		○		○	○					○	○	
		なばな	○	○			○		○								○	○	
		こまつな	○	○			○		○								○	○	
		みずな	○	○			○		○								○	○	
		レタス	○	○			○		○		○	○						○	
		ほうれんそう	○	○			○		○				○	○	○	○		○	
		ねぎ	○	○			○		○		○								○
		たまねぎ	○	○			○		○		○								○
		にんじく	○	○			○		○		○								○
		グリーンアスパラガス	○	○			○		○		○						○		○
		促成アスパラガス	○	○			○		○		○								○
		にら	○	○			○		○										○
しろそ	○	○			○		○		○				○				○		
たらのき	○	○			○		○		○								○		
まこもたけ	○	○			○		○												
ぎょうじゃにく	○	○			○		○										○		
んにく																			
あさつき	○	○			○		○												

表1 作物ごとの導入すべき農業生産方式一覧-2

作物名		区分 農業生産の 方式内容	堆肥等 施用技術		化学肥料 低減技術			化学合成農薬低減技術											
			堆肥等有機質資材施用技術	緑肥作物施用技術	局所施肥技術	肥効調節型肥料施用技術	有機質肥料施用技術	温湯種子消毒技術	機械除草技術	除草用動物利用技術	生物農薬利用技術	対抗植物利用技術	抵抗性品種栽培・台木利用技術	熱利用土壌消毒技術	光利用技術	被覆栽培技術	フェロモン剤利用技術	マルチ栽培技術	
野菜	根菜類	だいこん	○	○			○		○		○	○						○	
		かぶ	○	○			○		○		○								
		にんじん	○	○			○		○		○	○							○
		ごぼう	○	○		○	○		○		○	○							○
		しょうが	○	○			○		○		○								○
花	き	りんどう	○			○					○			○	○			○	
		小ぎく	○				○			○				○	○			○	
果	樹	りんご	○	○			○		○		○							○	
		ぶどう	○	○			○		○		○					○			
		西洋なし	○	○			○		○		○						○	○	
		日本なし	○	○			○		○		○							○	
		おうとう	○	○			○		○		○							○	
		うめ	○	○			○		○		○							○	
		ベリー類	○	○			○		○		○								
		かき	○	○			○		○		○								
飼料作物		とうもろこし	○				○												
		牧草	○			○	○		○										
		飼料用稲	○		○	○	○	○	○	○								○	
芝		芝類	○				○												

2 作物ごとの導入すべき農業生産方式の内容

(1) 稲

ア 水稻

区分	農業生産方式の内容	使用の目安
堆肥等施用技術	<p>◎ 堆肥等有機質資材施用技術 (土壌診断に基づいた適切な堆肥等の施用。C/N比がおおむね10から150の堆肥等を施用する。以下に県内家畜ふん堆肥等の現物窒素濃度とC/N比の平均的な値を畜種ごとに記した。以下、各品目とも同様であるので略記)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら、麦わら等堆肥 (現物窒素約0.2~0.5%、C/N比約10~60) ○ 稲わら、麦わら (現物窒素約0.4~0.6%、C/N比約50~120) ○ 復元田での大豆、牧草等作物残渣のすき込み 	<p>(10a当たり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1t程度 ○ 0.3t程度 ○ 0.3t程度 ○ 1.2~1.5t程度 ○ 0.4~0.6t程度
化学肥料低減技術	<p>◎ 局所施肥技術</p> <p>◎ 肥効調節型肥料施用技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料の基肥施用 ○ 初期溶出抑制肥効調節型肥料による育苗箱全量施肥 <p>◎ 有機質肥料施用技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の利用技術 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの 	<p>◎ 基準窒素施肥量を1~3割削減</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 基準窒素施肥量を1~3割削減(別表1参照) ○ 基準窒素施肥量を2~3割削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4、5参照(補給型施肥基準・減肥基準の適用)
化学合成農薬低減技術	<p>◎ 機械除草技術</p> <p>◎ 除草用動物利用技術</p> <p>◎ マルチ栽培技術</p> <p>◎ 生物農薬利用技術</p> <p>◎ 温湯種子消毒技術</p>	<p>◎ 除草剤使用回数1回以下 ※1</p> <p>◎ カメムシ防除回数を抑制 ※2</p> <p>◎ 除草剤使用回数1回以下</p> <p>◎ 除草剤使用回数1回以下</p> <p>◎ 化学合成殺菌剤による種子消毒を削減</p> <p>◎ 殺菌剤による種子消毒を削減</p>
その他の留意事項	<p>※1 機械除草技術に深水管理や2回代かきを組み合わせることで除草効果が高まる。</p> <p>※2 機械除草技術「カメムシ防除回数を抑制」は、地域一斉に適期(5月下旬~6月上旬、7月下旬)に水田畦畔雑草を刈り取る技術である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機物の腐熟促進のみを目的として石灰窒素等を施用する場合は化学肥料の使用量にカウントする必要はない 	

(2) 麦
ア 小麦

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら、麦わら堆肥 (現物窒素約0.2~0.5%、C/NN比約10~60) ○ 稲わら、麦わら (現物窒素約0.4~0.6%、C/N比約50~120) ◎ 緑肥作物施用技術	(10a 当たり) <ul style="list-style-type: none"> ○ 1.5 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 2 t 程度 ○ 0.4~0.6 t 程度 ◎ 1~2 t 程度
化学肥料 低減技術	◎ 局所施肥技術 ◎ 有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの 	◎ 基準窒素施肥量 から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量 以下 <ul style="list-style-type: none"> ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・ 減肥基準(別表6、7 参照)の適用
化学合成農 薬低減技術	◎ 機械除草技術 ◎ 温湯種子消毒技術	◎ 除草剤使用回数 1回以下 ◎ 殺菌剤による種子 消毒を削減
その他の 留意事項		

イ 大麦

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
堆肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 堆肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら、麦わら堆肥 (現物窒素約0.2~0.5%、C/N比約10~60) ○ 稲わら、麦わら (現物窒素約0.4~0.6%、C/N比約50~120) ◎ 緑肥作物施用技術 	<p>(10a 当たり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1.5 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 2 t 程度 ○ 0.4~0.6 t 程度 <p>◎ 1~2 t 程度</p>
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 局所施肥技術 ◎ 有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 機械除草技術 ◎ 温湯種子消毒技術 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 除草剤使用回数1回以下 ◎ 殺菌剤による種子消毒を削減
その他の 留意事項		

(3) 豆
ア 大豆

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら、麦わら堆肥 (現物窒素約0.2~0.5%、C/N比約10~60) ○ 稲わら、麦わら (現物窒素約0.4~0.6%、C/N比約50~120) ◎ 緑肥作物施用技術	(10a 当たり) ○ 1.5 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 2 t 程度 ○ 0.4~0.6 t 程度 ◎ 2~4 t
化学肥料 低減技術	◎ 局所施肥技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの	◎ 基準窒素施肥量から 2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	◎ 機械除草技術	◎ 除草剤使用回数1回以下
その他の 留意事項		

(4) いも類
ア ばれいしょ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤使用回数を慣行の2割以上削減
◎ 機械除草技術	◎ 雑草		
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 光利用技術		◎ アブラムシ類、オオジョウヤコソテントウ	
その他の 留意事項			

イ ながいも

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 3.0 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 4.0 t 程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数2回以下 ◎ 除草剤の使用回数2回以下
◎ 機械除草 ◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草 ◎ 雑草		
その他の 留意事項			

ウ さといも

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 3.0 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 4.0t程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ 機械除草技術 ◎ マルチ栽培技術	対象病虫害等 ◎ 雑草 ◎ 雑草	◎ 除草剤の使用回数2回以下 ◎ 除草剤の使用回数2回以下
その他の 留意事項			

エ かんしょ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 1.0 t 程度 ○ 0.3 t 程度 ○ 0.3 t 程度 ○ 1.5t程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ 機械除草技術 ◎ マルチ栽培技術	対象病虫害等 ◎ 雑草 ◎ 雑草	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 除草剤の使用回数1回以下
その他の 留意事項			

(5) 雑穀類等

ア 雑穀類 (そば、ひえ、あわ、きび、たかきび、はとむぎ)

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
堆肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 堆肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら、麦わら堆肥 (現物窒素約0.2~0.5%、C/N比約10~60) ○ 稲わら、麦わら、雑穀類の残穢 (現物窒素約0.4~0.6%、C/N比約50~120) ◎ 緑肥作物施用技術 	<p>(10 a 当たり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1.5 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 0.4 t 程度 ○ 2 t 程度 ○ 0.4~0.6 t 程度 <p>◎ イネ科作物:2t程度、 豆科作物:1~2t</p>
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 局所施肥技術 ◎ 有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの 	<p>◎ 基準窒素施肥量から 2割程度削減</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減 肥基準(別表6、7参照) の適用
化学合成 農薬低減 技術	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 機械除草技術 ◎ マルチ栽培技術 ◎ 生物農薬利用技術 	<p>◎ 除草剤の使用回 数1回以下</p> <p>◎ 除草剤の使用回数1 回以下</p> <p>◎ 殺虫剤による防除を 削減。</p>
その他の 留意事項	<p>○ そばに対して、堆肥等施用技術及び化学肥料低減技術として堆肥を施用する場合には、上記及び別表2の半量以下とする。</p>	

イ スイートコーン

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2～5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、 化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ マルチ栽培技術 ◎ 生物農薬利用技術	対象病虫害等 ◎ 雑草 ◎ アワノメイガ	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤による防除を削減。
その他の 留意事項			

(6) 野菜
ア きゅうり

区分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 4.0 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 5.0 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 局所施肥技術 ○ 点滴かん水施肥栽培 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ◎ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎除草剤の使用回数1回以下 ◎殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 生物農薬利用技術	◎ 施設の灰色かび病、うどんこ病、ワタリクメイガ、ヨトウガ		
◎ 被覆栽培技術	◎ アブラムシ類など		
◎ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	◎ アブラムシ類、アザミマ類 ◎ つる割れ病		
その他の 留意事項			

イ トマト（ミニトマトを含む）

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 4.0 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 5.0t程度 ○ 隔離床栽培等で使用する培地は、地域土壌の比率が50%以上であること。 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 局所施肥技術 ○ 点滴かん水施肥栽培 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 生物農薬利用技術	◎ 灰色かび病、うどんこ病、オシツコジラミ、オタバコガ		
◎ 被覆栽培技術	◎ 疫病、かいよう病、アブラムシ類、オシツコジラミ、アザミヤマ類		
◎ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ◎ 光利用技術	◎ 青枯病、半身萎ちょう病、萎ちょう病、葉かび病 ◎ アブラムシ類、オシツコジラミ、アザミヤマ類		
その他の 留意事項			

ウ なす

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 4.0 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 5.0 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 局所施肥技術 ○ 点滴かん水施肥技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 生物農薬利用技術	◎ 灰色かび病、うどんこ病、アザミウマ類、ハダニ類		
◎ 被覆栽培技術	◎ アブラムシ類、オシロイソウシ		
◎ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	◎ 半枯病、青枯病、半身萎ちょう病		
◎ 光利用技術	◎ アブラムシ類、アザミウマ類		
その他の 留意事項	○ 生物農薬利用技術の導入にあたっては、平成25年度県試験研究成果を参照のこと。また、適用が施設栽培に限定される農薬があることから、農薬の使用基準に留意すること。		

エ ピーマン

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 4.0 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 5.0 t 程度 ○ 2~5 t
化学肥料低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 局所施肥技術 ○ 点滴かん水施肥技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量から2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草	◎ 除草剤の使用回数1回以下
	◎ 生物農薬利用技術	◎ 灰色かび病、うどんこ病、ヨトウガ、材かこが、アザミヤ類、アブラムシ類、ハダニ類	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
	◎ 被覆栽培技術	◎ アブラムシ類、疫病	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
	◎ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	◎ 青枯病、ウイルス病	◎ 殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
	◎ 光利用技術	◎ アブラムシ類、アザミヤ類、ハダニ類	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の留意事項	○ 生物農薬利用技術の導入にあたっては、平成25年度県試験研究成果を参照のこと。また、適用が施設栽培に限定される農薬があることから、農薬の使用基準に留意すること。		

オ いちご

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 3.0 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 4.0 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量 以下 ○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照) の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ マルチ栽培技術 ◎ 生物農薬利用技術 ◎ 被覆栽培技術 ◎ 熱利用土壌消毒技術 ◎ 光利用技術	対象病虫害等 ◎ 雑草 ◎ 灰色かび病、うどんこ病ハダニ類、アザミウマ類、ヨトウガ ◎ 灰色かび病、アブラムシ類、アザミウマ類 ◎ 萎黄病、雑草 ◎ アブラムシ類、ホシツコナジラミ、アザミウマ類	使用の目安 ◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減または除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項	○ 生物農薬利用技術の導入にあたっては、平成25年度県試験研究成果を参照のこと。また、適用が施設栽培に限定される農薬があることから、農薬の使用基準に留意すること。		

カ さやえんどう

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

キ えだまめ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎ 機械除草技術	◎ 雑草		
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 光利用技術	◎ アブラムシ類		
その他の 留意事項			

ク はくさい

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2～5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ 機械除草技術 ◎ マルチ栽培技術 ◎ 生物農薬利用技術 ◎ 対抗植物利用技術	対象病虫害等 ◎ 雑草 ◎ 雑草 ◎ 軟腐病、コナガ、ヨトウムシ、モンシロチョウ ◎ キタネグサレセンチュウ、根こぶ病	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

ケ キャベツ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎局所施肥技術 ◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量 から2割程度削減 ○基準窒素施肥量以下 ○別表2、3、4参照 ○補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	◎ 機械除草技術	◎ 雑草	◎除草剤の使用回数1回以下
	◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草	◎ 除草剤の使用回数1回以下
	◎ 生物農薬利用技術	◎ 軟腐病、ヨトウガ、コナガ、モンシロチョウ	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
	◎ 対抗植物利用技術	◎ キタネグサレセンチュウ、根こぶ病	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
	◎ フェロモン剤利用技術	◎ コナガ	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
	◎ 被覆栽培技術	◎ ヨトウガ、コナガ、モンシロチョウ	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

コ なばな

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、 化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥 基準(別表6、7参照)の適 用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤を使用しない ◎ 殺虫剤の使用回数を慣 行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣 行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣 行の2割以上削減
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 生物農薬利用技術	◎ コナガ、モンシロ チョウ、ヨトウガ		
◎ 被覆栽培技術	◎ コナガ、アブラム シ類、モンシロチョ ウ、ヨトウガ		
◎ フェロモン剤利用技術	◎ コナガ		
その他の 留意事項			

サ こまつな

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤を使用しない ◎ 殺虫剤使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 生物農薬利用技術	◎ コナガ、モンシロチョウ、ヨトウガ		
その他の 留意事項			
◎ 被覆栽培技術		◎ コナガ、アブラムシ類、モンシロチョウ、ヨトウガ	

シ みずな

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 4.0 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 5.0 t 程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2,3,4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6,7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤を使用しない ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 生物農薬利用技術	◎ コナガ、モンシロチョウ、ヨトウガ		
◎ 被覆栽培技術	◎ コナガ		
その他の 留意事項			

ス レタス

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・ 減肥基準(別表6、7 参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ マルチ栽培技術 ◎ 生物農薬利用技術 ◎ 対抗植物利用技術	対象病虫害等 ◎ 雑草、腐敗性病害 ◎ 軟腐病、オオタバコガ、 ヨトウガ ◎ キタネグサレセンチュ ウ	◎ 除草剤の使用回 数1回以下または 殺菌剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減 ◎ 殺虫剤の使用回 数を慣行の2割以 上削減、または殺菌 剤の使用回数を慣 行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回 数を慣行の2割以 上削減
その他の 留意事項			

セ ほうれんそう

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 4.0 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 5.0 t 程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥 量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥 基準(別表6、7参照)の適 用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数1回 以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を 慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を 慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を 慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

ソ ねぎ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量から 2割程度削減 ○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減 肥基準(別表6、7参照) の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ 機械除草技術 ◎ 生物農薬利用技術	対象病虫害等 ◎ 雑草 ◎ 軟腐病、ヨトウガ	◎ 除草剤の使用回数1 回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減、 または殺菌剤の使用回 数を慣行の2割以上削 減
その他の 留意事項			

タ たまねぎ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥 基準(別表6、7参照)の適 用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数 1 回以下 ◎ 除草剤の使用回数 1 回以下 ◎ 殺 虫 剤の使用回数を 慣行の2割以上削減、ま たは殺菌剤の使用回数 を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

チ にんにく

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 3.0 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 4.0 t 程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量 以下 ○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減 肥基準(別表6、7参照) の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数 2 回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

ツ グリーンアスパラガス

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 3.0 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 4.0 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量 以下 ○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減 肥基準(別表6、7参照) の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数2 回以下 ◎ 除草剤の使用回数2 回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を 慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

テ 促成アスパラガス

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 4.0 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 1.2 t 程度 ○ 5.0 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量 以下 ○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減 肥基準(別表6、7参照) の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数2 回以下 ◎ 除草剤の使用回数2 回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減
◎ 機械除草技術	◎ 雑草		
◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草		
◎ 生物農薬利用技術	◎ ヨトウガ		
その他の 留意事項			

ト なら

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 3.0 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 0.9 t 程度 ○ 4.0 t 程度 ◎ 2~5t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数2回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎ マルチ栽培技術 ◎ 生物農薬利用技術	◎ 雑草 ◎ ヨトウガ		
その他の 留意事項			

ナ しそ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤は使用しない ◎ 除草剤は使用しない ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

ニ たらのき

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	◎ 機械除草技術	◎ 雑草	◎ 除草剤は使用しない
	◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草	◎ 除草剤は使用しない
	◎ 生物農薬利用技術	◎ センノカミキリ	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

ヌ まこもたけ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術 作付け時に窒素飢餓状態等にならないように、期間を考慮してすき込むこと。		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 慣行窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤は使用しない
	◎ 機械除草技術	◎ 雑草	
その他の 留意事項			

ネ ギョウジャニンニク

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、 化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 慣行窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 減肥基準(別表6、7参 照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤は使用しない ◎ 除草剤は使用しない
	◎ 機械除草技術 ◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草 ◎ 雑草	
その他の 留意事項			

ノ あさつき

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 慣行窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤は使用しない
	◎ 機械除草技術	◎ 雑草	
その他の 留意事項			

ハ だいこん

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、 化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基 準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	◎ 機械除草技術	◎ 雑草	◎ 除草剤の使用回数1回以 下
	◎ マルチ栽培技術	◎ 雑草	◎ 除草剤の使用回数1回以 下
	◎ 生物農薬利用技術	◎ 軟腐病、コナガ、ヨ トウムシ、モンシロ チョウ	◎ 殺虫剤の使用回数を慣行 の2割以上削減、または殺 菌剤の使用回数を慣行の2 割以上削減
	◎ 対抗植物利用技術	◎ キタネグサレセン チュウ	◎ センチュウ対象薬剤を使 用しない
その他の 留意事項			

ヒ かぶ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○別表2,3,4参照 ○減肥基準(別表6,7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
	◎ 機械除草技術 ◎ 生物農薬利用技術	◎ 雑草 ◎ コナガ、ヨトウガ	
その他の 留意事項			

フ にんじん

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ 機械除草技術 ◎ マルチ栽培技術 ◎ 対抗植物利用技術 ◎ 生物農薬利用技術	対象病虫害等 ◎ 雑草 ◎ 雑草 ◎ キタネグサレセンチュウ ◎ ヨトウガ	◎ 除草剤の使用回数2回以下 ◎ 除草剤の使用回数2回以下 ◎ センチュウ対象薬剤を使用しない ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		◎ 基準窒素施肥量 以下 ○ 基準窒素施肥量 以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・ 減肥基準(別表6、7参 照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	◎機械除草技術	◎雑草	◎ 除草剤の使用回数 2回以下
	◎マルチ栽培技術	◎雑草	◎ 除草剤の使用回数 2回以下
	◎対抗植物利用技術	◎キタネグサレセンチュウ	◎ センチュウ対象薬 剤を使用しない
	◎生物農薬利用技術	◎ヨトウガ	◎ 殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上削 減
その他の 留意事項			

ホ しょうが

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎ 緑肥作物施用技術		(10 a 当たり) ○ 2.0 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 0.6 t 程度 ○ 2.5 t 程度 ◎ 2~5 t
化学肥料 低減技術	◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎ 除草剤の使用回数 数1回以下 ◎ 除草剤の使用回数1 回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を 慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

(7) 花き
ア りんどう

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎ 堆肥等有機質資材施用技術 ○ 牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○ 豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○ 稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19)		(10a 当たり) ○ 定植年:3.0t 2年目以降:2.0t ○ 定植年:0.9t 2年目以降:0.6t ○ 定植年:0.9t 2年目以降:0.6t ○ 定植年:4.0t 2年目以降:2.5t
化学肥料 低減技術	◎ 肥効調節型肥料施用技術 ◎ 有機質肥料施用技術 ○ 有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○ 堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○ 基準窒素施肥量以下 ○ 別表2、3、4参照 ○ 補給型施肥基準・減肥基準(別表6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎ マルチ栽培技術 ◎ 対抗植物利用技術 ◎ 被覆栽培技術 ◎ 光利用技術	対象病害虫等 ◎ 雑草 ◎ 褐色根腐病、ネコブセンチュウ ◎ 葉枯病、褐斑病 ◎ アブラムシ類、オンシツコナジラミ、アザミウマ類	◎ 除草剤の使用回数1回以下 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減、または殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎ 殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

イ 小ぎく

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19)		(10 a 当たり) ○2.0 t 程度 ○0.6 t 程度 ○0.6 t 程度 ○2.5 t 程度
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量 以下 ○水稲別表2、3、4参照 ○補給型施肥基準・ 減肥基準(小麦別表 6、7参照)の適用
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎除草剤の使用回数 1回以下 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減 ◎殺菌剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減
◎マルチ栽培技術	◎雑草		
◎生物農薬利用技術	◎ヨトウガ		
◎被覆栽培技術	◎白さび病		
◎光利用技術	◎アブラムシ類、ホシツコナジ ラミ、アザミマ類		
その他の 留意事項			

(8) 果 樹
ア りんご

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する		(10 a 当たり) ○1.0～2.0 t ○0.3～0.6 t ○0.3～0.6 t ○1.2～2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量 以下 ○水稲別表2、3、4参 照 (補給型施肥基準の 適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎機械除草技術 ◎マルチ栽培技術 ◎生物農薬利用技術 ◎フェロモン剤利用技術	対象病虫害等 ◎雑草 ◎雑草 ◎ハマキムシ類、モモシクイガ ◎モモシクイガ、ナシヒメシクイ、 キンモンホリガ、ハマキムシ類	◎除草剤の使用回 数2回以下 ◎除草剤の使用回 数2回以下 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減
その他の 留意事項			

イ ぶどう

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する		(10 a 当たり) ○1.0～2.0 t ○0.3～0.6 t ○0.3～0.6 t ○1.2～2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量 以下 ○水稲別表2、3、4参照 (補給型施肥基準の適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎除草剤の使用回数2回以下 ◎殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎殺菌剤の使用回数を慣行の2割以上削減
◎機械除草技術	◎雑草		
◎被覆栽培技術	◎晩腐病		
◎生物農薬利用技術	◎灰色カビ病		
その他の 留意事項			

ウ 西洋なし

区分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する		(10a 当たり) ○1.0～2.0 t ○0.3～0.6 t ○0.3～0.6 t ○1.2～2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量以下 ○水稲別表2、3、4参照 (補給型施肥基準の適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	◎機械除草技術 ◎マルチ栽培技術 ◎生物農薬利用技術 ◎フェロモン剤利用技術 ◎被覆栽培技術	◎雑草 ◎雑草 ◎ハマキムシ類 ◎モシクイガ、ナシメシクイ、ハマキムシ類 ◎輪紋病、モシクイガ、ナシメシクイ	
その他の 留意事項			

エ 日本なし

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する		(10 a 当たり) ○1.0～2.0 t ○0.3～0.6 t ○0.3～0.6 t ○1.2～2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量 以下 ○水稻別表2、3、4参 照
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎機械除草技術 ◎マルチ栽培技術 ◎生物農薬利用技術 ◎フェロモン剤利用技術	対象病虫害等 ◎雑草 ◎雑草 ◎ハマキムシ類 ◎モモンクイ [※] 、ナシメシクイ、 ハマキムシ類	◎除草剤の使用回 数2回以下 ◎除草剤の使用回 数2回以下 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減
その他の 留意事項			

オ おうとう

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する		(10 a 当たり) ○1.0～2.0 t ○0.3～0.6 t ○0.3～0.6 t ○1.2～2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量 以下 ○水稻別表2、3、4参照 (補給型施肥基準の適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎機械除草技術 ◎フェロモン剤利用技術 ◎生物農薬利用技術	対象病害虫等 ◎雑草 ◎コスカシバ ◎ハマキムシ類、ケムシ類	◎除草剤の使用回数 2回以下 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減 ◎殺虫剤の使用回数 を慣行の2割以上 削減
その他の 留意事項			

カ うめ

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する		(10 a 当たり) ○1.0～2.0 t ○0.3～0.6 t ○0.3～0.6 t ○1.2～2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量以下 ○水稲別表2、3、4参照 (補給型施肥基準の適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎機械除草技術 ◎マルチ栽培技術 ◎フェロモン剤利用技術 ◎生物農薬利用技術	対象病害虫等 ◎雑草 ◎雑草 ◎コスカシバ ◎ハマキムシ類	◎除草剤の使用回数2回以下 ◎除草剤の使用回数2回以下 ◎殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減 ◎殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

キ ベリー類 (ブルーベリー、ラズベリー、ブラックベリー等)

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ○バーク堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約30) [ブルーベリーについては、バーク堆肥等の養分含有率の低いものを利用する] ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する。		(10 a 当たり) ○1.0～2.0 t ○0.3～0.6 t ○0.3～0.6 t ○1.2～2.4 t ○1.2～2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量以下 ○水稻別表2、3、4参照
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎機械除草技術 ◎マルチ栽培技術 ◎生物農薬利用技術	対象病虫害等 ◎雑草 ◎雑草 ◎ハマキムシ類、イラガ類	◎除草剤の使用回数2回以下 ◎除草剤の使用回数2回以下 ◎殺虫剤の使用回数を慣行の2割以上削減
その他の 留意事項			

ク かき

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら堆肥(現物窒素約0.4%、C/N比約19) ◎緑肥作物施用技術 ○草生栽培とし刈り取った草を樹幹下に施用する。		(10 a 当たり) ○1.0~2.0 t ○0.3~0.6 t ○0.3~0.6 t ○1.2~2.4 t
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量 以下 ○水稲別表2、3、4参 照
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病害虫等	◎除草剤の使用回 数2回以下 ◎除草剤の使用回 数2回以下 ◎殺虫剤の使用回 数を慣行の2割 以上削減
	◎機械除草技術 ◎マルチ栽培技術 ◎生物農薬利用技術	◎雑草 ◎雑草 ◎イラガ、カキノヘタ ムシガ、ハマキムシ 類	
その他の 留意事項			

(9) 飼料作物
ア とうもろこし

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12)		(10 a 当たり) ○3 t 程度 ○1 t 程度 ○1 t 程度
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基準窒素施肥量 以下 ○水稲別表2、3、4参 照 (補給型施肥基準 の適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎除草剤使用回 数2回以下
その他の 留意事項			

イ 牧 草

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○牛液状きゅう肥(現物窒素約0.4%、C/N比約10)		(10 a 当たり) ○3 t 程度 ○1 t 程度 ○1 t 程度 ○5 t 程度
化学肥料 低減技術	◎肥効調節型肥料施用技術 ◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○基肥窒素施肥量を2割程度削減 ○基準窒素施肥量以下 ○水稲別表2、3、4参照 (補給型施肥基準の適用)
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術 ◎機械除草技術(掃除刈り*) ※草地全体を牧草と雑草が覆い、 土壌表面が見えなくなった頃を目 安に実施	対象病虫害等 ◎雑草	◎除草剤使用回数 1回以内
その他の 留意事項			

ウ 飼料用稲

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
堆肥等 施用技術	<p>◎堆肥等有機質資材施用技術 (土壌診断に基づいた適切な堆肥等の施用。C/N比がおおむね10から150の堆肥等を施用する。以下に県内家畜ふん堆肥等の現物窒素濃度とC/N比の平均的な値を畜種ごとに記した。以下、各品目とも同様であるので略記)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○稲わら、麦わら等堆肥 (現物窒素約0.2~0.5%、C/N比約10~60) ○稲わら、麦わら (現物窒素約0.4~0.6%、C/N比約50~120) ○還元田での大豆、牧草等作物残渣のすき込み 	<p>(10aあたり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○1t程度 ○0.3t程度 ○0.3t程度 ○1.2~1.5t程度 ○0.4~0.6t程度
化学肥料 低減技術	<p>◎局所施肥技術</p> <p>◎肥効調節型肥料施用技術 ○肥効調節型肥料の基肥施用</p> <p>○初期溶出抑制肥効調節型肥料による育苗箱全量施肥</p> <p>◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること</p> <p>○堆肥等の利用技術 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの</p>	<p>◎基準窒素施肥量を1~3割削減</p> <p>○基準窒素施肥量を1~3割削減(別表1参照)</p> <p>○基準窒素施肥量を2~3割削減</p> <p>○基準窒素施肥量以下</p> <p>○別表2、3、4、5参照(補給型施肥基準・減肥基準の適用)</p>
化学合成 農薬低減 技術	<p>◎機械除草技術</p> <p>◎除草用動物利用技術</p> <p>◎マルチ栽培技術</p> <p>◎生物農薬利用技術</p> <p>◎温湯種子消毒技術</p>	<p>◎除草剤使用回数1回以下 ※1</p> <p>◎カメムシ防除回数を抑制 ※2</p> <p>◎除草剤使用回数1回以下</p> <p>◎除草剤使用回数1回以下</p> <p>◎化学合成殺菌剤による種子消毒を削減</p> <p>◎殺菌剤による種子消毒を削減</p>
その他の 留意事項	<p>※1 機械除草技術に深水管理や2回代かきを組み合わせることで除草効果が高まる。</p> <p>※2 機械除草技術「カメムシ防除回数を抑制」は、周辺の主食用米への影響を考慮し、地域一斉に適期(5月下旬~6月上旬、7月下旬)に水田畦畔雑草を刈り取る技術である。</p> <p>・有機物の腐熟促進のみを目的として石灰窒素等を施用する場合は化学肥料の使用量にカウントする必要はない</p>	

(10) 芝
ア 芝類

区 分	農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等 施用技術	◎堆肥等有機質資材施用技術 ○牛ふん堆肥(現物窒素約0.6%、C/N比約18) ○豚ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○鶏ふん堆肥(現物窒素約2.1%、C/N比約12) ○牛液状きゅう肥(現物窒素約0.4%、C/N比約10)		(10a 当たり) ○3 t 程度 ○1 t 程度 ○1 t 程度 ○5 t 程度
化学肥料 低減技術	◎有機質肥料施用技術 ○有機質肥料の利用 施肥窒素の2割以上が有機質に由来すること ○堆肥等の適正利用 堆肥由来の窒素及びリン酸・カリ成分を活用し、化学肥料由来の該当成分を低減するもの		○慣行窒素施肥量 以下 ○水稻別表2、3、4参 照
化学合成 農薬低減 技術	導入する個別技術	対象病虫害等	◎殺虫剤の使用回 数を慣行の2割 以上削減
	◎生物農薬利用技術	◎スジキリヨトウ、シ バツトガ、タマナヤガ	
その他の 留意事項			

別表1 肥効調節型肥料の施肥基準

施肥区分	主 要 土 壤	基肥窒素施肥量
全層施肥	○黒ボクグライ土、灰色台地土、 グライ台地土、褐色低地土、 灰色低地土、グライ土、黒泥土	○(基準基肥+追肥量)の80-90%
	○多湿黒ボク土	○(基準基肥+追肥量)の70-90%
側条施肥	○黒ボクグライ土、灰色台地土、 グライ台地土、黄色土、褐色低地土、 灰色低地土、グライ土、黒泥土	○(基準基肥+追肥量)の80-90%
	○多湿黒ボク土	○(基準基肥+追肥量)の70-80%

※ 肥効調節型肥料(100日タイプ前後)を窒素成分中の60~70%配合した肥料を用いる。

別表2 C/N比の低い堆肥等を利用して化学肥料由来窒素を代替する場合の施肥基準

施用する堆肥の乾物中窒素濃度	資材の特徴	窒素5kgを代替する場合の目安の現物施用量*
1.8%未満 (C/N比20以上)	化学肥料代替技術は適用しない	—
1.8%以上～2.5%未満 (C/N比15～20)	窒素の肥効は化肥の20～30%程度と見積もる。	650～2500kg/10a
2.5%以上～3.5%未満 (C/N比10～15)	窒素の肥効は化肥の30～40%程度と見積もる。	350～1200kg/10a
3.5%以上 (C/N比10未満)	窒素の肥効は化肥にかなり近い前提で利用する。C/N比が小さい程肥効は高い。	350kg/a以下

*現物水分は30～50%程度であることを想定して計算した目安の施用量。

別表3 堆肥を利用して化学肥料由来窒素を削減した研究成果一覧

適用作物 (化学肥料削減率)	施用する堆肥の 乾物中窒素濃度等	施用方法
水稲 (50%)	1.8%以上～2.5%未満 (C/N比15～20)	窒素の肥効は化学肥料の20%程度と見積もる。
	2.5%以上～3.5%未満 (C/N比10～15)	窒素の肥効は化学肥料の30%程度と見積もる。
ながいも (50%)	1.8%以上～2.5%未満 (C/N比15～20)	窒素の肥効は化学肥料の20%程度と見積もる。
	2.5%以上～3.5%未満 (C/N比10～15)	窒素の肥効は化学肥料の30～40%程度と見積もる。
スイートコーン (50%)	1.8%以上～3.5%未満 (C/N比10～20)	窒素の肥効は化学肥料の20%程度と見積もる。
キャベツ (50%)	1.8%以上～2.5%未満 (C/N比15～20)	窒素の肥効は化学肥料の30%程度と見積もる。
	2.5%以上～3.5%未満 (C/N比10～15)	窒素の肥効は化学肥料の30% (秋まき) ～40% (春まき) 程度と見積もる。
牧草 (50～100%)	1.8%以上～3.5%未満 (C/N比10～20)	窒素の肥効は化肥の20～50%程度と見積もる。 化肥と組み合わせることが望ましい。
	2.5%以上～3.5%未満 (C/N比10～15)	窒素の肥効はかなり化学肥料に近い前提で利用する。液状コンポスト中の窒素は簡易分析を行って成分濃度を把握し、化学肥料窒素の8割程度の肥効と見積もる。

別表4 主要な堆肥等の成分例

(現物中%)

	水分	窒素	リン酸	カリ	炭素	C/N比	石灰	苦土
発酵鶏ふん	40	1.9	2.8	1.6	18	11	6.3	0.8
乾燥鶏ふん	26	3.6	2.9	2.0	31	9	3.4	0.8
鶏ふん焼却灰	0	0.2	24.4	9.2	—	—	16.7	4.4
発酵豚ふん	36	2.1	2.6	1.7	22	12	2.2	0.9
牛ふん堆肥	69	0.6	0.4	0.6	10	18	0.5	0.2
パーク堆肥	60	1.2	0.8	0.7	40	33	2.7	0.4
稲わら	10	0.5	0.2	1.9	38	77	0.5	0.1

平成14年度岩手農研セ研究成果等から作成

別表5 水田でのリン酸、カリの減肥基準

	水準	施肥量	土壌改良
可給態リン酸 ※1	～6未満	標準施肥	必要※2
	6～30	標準施肥	不要
	30以上	100%減肥	
交換性カリ	～20未満	標準施肥	必要※3
	20～40	標準施肥	不要
	40以上	100%減肥	

※1 トルオーグ法による

※2 リン酸改良資材の施用量は可給態リン酸6mg/100gを目標とする

※3 交換性カリウム20mg/100gを目標としてカリウムの土壌改良を実施

別表6 園芸品目等のリン酸減肥基準

	黒ボク土		非黒ボク土	
	可給態リン酸 (mg/100g)	減肥基準	可給態リン酸 (mg/100g)	減肥基準
低リン酸作物 ※1	～30	標準施肥	～30	標準施肥
	30～50	50%減肥	30～50	80%減肥
	50～	100%減肥	50～	100%減肥
高リン酸作物 ※2	～30	標準施肥	～30	標準施肥
	30～100	50%減肥	30～50	50%減肥
	100～	100%減肥	50～	100%減肥

※1 だいこん、にんじん、キャベツ、はくさい、えだまめ、普通畑作物

※2 低リン酸作物以外の野菜等

別表7 園芸品目等のカリ減肥基準

C E C (me)	交換性カリ (mg/100g)	減肥基準	対応するカリ 飽和度(%)
10	～25	標準施肥	～5
	25～50	50%減肥	5～11
	50以上	100%減肥	11以上
15	～35	標準施肥	～5
	35～70	50%減肥	5～10
	70以上	100%減肥	10以上
20	～45	標準施肥	～5
	45～70	50%減肥	5～7
	70以上	100%減肥	7以上
25	～60	標準施肥	～5
	60～70	50%減肥	5～6
	70以上	100%減肥	6以上